

冬場の豚舎環境と子豚管理

以前にも、冬場の子豚管理について本誌（まきば，145号，2013年正月号）で紹介しましたが、今回も引き続き冬場の子豚の管理について記載します。冬場は豚舎環境の管理が難しく、豚舎環境の悪化は子豚に下痢や肺炎を引き起こしてしまいます。しかし、冬場の子豚をうまく管理することで、春から初夏にかけての肥育豚の出荷成績をアップすることができます。

○冬場の換気

冬場に換気しないと、豚舎の湿度が高くなり、結露による豚舎内の環境悪化や、肺炎のもととなります。特に結露で床が濡れた状態になると、子豚の体が冷えるため下痢などが発生しやすくなってしまいます。しかし、換気すると豚舎の室温が下がってしまいます。難しいですが、何とかしないといけません。

分娩豚舎などでは、寒い時期は保温を重視して、母豚や子豚を温めるためにストールの上にビニールシートを張ります。シートで覆うと、暖かい空気が上に逃げないので、母豚や子豚のいるエリアが温められます。

離乳した直後の子豚などは逃げ込める保温スペースを確保することが有効です。また、暖かい空気は畜舎の上にたまります。畜舎の空気を循環させる必要があります。扇風機やファンなどを天井にあて、空気を循環させることが有効です。しかし、あまり送風が強すぎると逆に豚を冷やしてしまうため注意が必要です。

換気する場合は、出気口を大きくし、ファンなどで排気し、入気口を狭くすることで、入気の風速が強くなり、換気が進みます。この場合、入気口はできるだけ、畜舎の上方に設け、暖かい空気に入気した冷たい風を混ぜる工夫が有効です。また、畜舎の上方に入気口を設けることで、豚に冷たい風が直接当たらなくなります。逆に排気口は豚舎の中ほどから下方に持ってくるのが良いです。排気口のファンなどが無い解放豚舎で換気する場合は、子豚の居住スペースにビニールシートを張るなどして、子豚に直接風が当たらないようにします。

○子豚の群管理

子豚は腹ごとに、観察が必要です。また、日々、状態が異なる場合があります。（暖かそうにしている・寒そうにしている）（餌を食べて腹がふくらんでいる・餌を食べていない）などは、特に注意しないといけないポイントです。その他、「皮膚の状態」（被毛が粗い・こ

まかい) (つやがある・ない) (はりがある・ない)「バラツキ」(バラツキがある・ない) (バラツキの程度が大きい・小さい)「活発さ」(活発さがある・ない)「股びらき」(股びらきがある・ない) など、様々な状態をチェックします。

- 冬場「寒そうにしている」場合は、昼と夜の気温差、畜舎のすきま風、ピット下（スノコの下）から冷たい風が入ってきていないか？などに注意する必要があります。すきま風はシートや板で穴を塞ぎます。スノコ下からの風は、保温箱内に、塗装コンパネをカットして敷きます。この場合、コンパネにドリルで穴をあけ、下のスノコに結束バンドなどで軽く固定しておくとう便利です。また、子豚の体温を測定するには、簡易な赤外線温度測定器が便利です。赤外線温度測定器なら、子豚に触れることなく子豚の表面温度が測定できます。
- 分娩前後の管理：子豚は薄明るいところを好みます。ヒーターは母豚のお尻の位置と、保温箱内に2個設置するのが望ましいです。ヒーターが一つしかない場合は、お尻の位置に設置し、子豚が初乳を飲み終わって、被毛が乾いた時点で、保温箱内に設置します。出生直後の子豚は被毛が濡れており、皮下脂肪も少ないために、早く初乳を飲まないと冷えて弱ってしまいます。分娩直後のお尻の位置にヒーターがあると、体が冷える前に、母豚の乳房に吸い付き初乳を飲むことができます。初乳を飲んだ子豚は、エネルギーを得るため体温を保つことができます。また、子豚の保温箱内に、パネル型のヒーターを置くのも良い方法です。子豚のお腹をあたためると、子豚の消化管の活性も高くなり、子豚の調子が良くなります。しかし、子豚が大きくなると電気の線を噛むため、注意が必要です。
- 被毛の状態：特に、子豚の体が汚れている場合は注意が必要です。下痢、人工乳が濡れている（餌付け飼料の過剰給与：給餌器を置く位置が悪い：給餌器の掃除ができていない）（スス病が発生している）などが考えられます。また、子豚の耳が傷だらけになっている場合は「病気の発生」や「畜舎温度が不適切」などが、考えられます。すきま風の有無や室温が下がっていないかをチェックします。子豚は、病気や温度などのストレスがかかると耳かじり行動を起こします。また、耳に多くの傷がある子豚は、耳をかじられても、逃げる活力もないとも言われます。（皮膚のはり）も注意が必要です。皮膚にしわがよって、脱水症状を起こしている場合があります。
- 虚弱・股びらきへの対策：新生子豚の虚弱や股びらきの原因は多様なので対策は難しいのですが、妊娠中の母豚に給与する飼料のエネルギーを高めたり、ビタミンを飼料添加することが有効ではないかと言われています。また、妊娠母豚を冷やさないように、分娩前の豚舎温度を高めることが特に有効であるとは言いわれています。虚弱な子豚が多いに対しては分娩舎内の温度を上げるために、暖房器具を用意するなどの対策が必要です。初期の子豚の股びらきに対しては8の字テーピングも有効な手段です。

- 冬場は特に子豚に十分な飼料を食べさせることが必要です。十分な飼料を食べるためには、十分な水を飲むことが必要です。生まれた子豚には餌付けをする前に、まず、水付けをします。それでも、たまに水が飲めていない子豚がいます。このような場合には少し温めたお湯を給与すると水を飲むようになる場合があります。また、7日齢以降であれば、餌付け用の飼料に暖かいお湯を少し加え給与することで、餌付け、水付けの失敗を少なくできます。ただ、濡れた人工乳はすぐに腐敗しますので、半日程度で取り換えることが必要です。通常の餌付けの場合も、飼料は少量を給与し、毎日取り換えます。餌付け用給餌器も汚れた場合はすぐに洗浄し、乾燥させます。餌付けの場合は、子豚の足が給餌器に入ったり、給餌器に子豚や母豚の尿や糞がつくため、清潔に保つことが必要です。また、同腹の子豚の中でバラツキが大きい場合は、分割授乳も有効です。この場合、大きい子豚を1－2時間程度、保温箱の中に閉じ込めておいて、一日2回程度、小さい子豚に十分に哺乳させます。哺乳中は、どの腹のどの子豚が餌を食べていないのか？水をあまり飲んでいないか？など早期に気づくことで、その後のバラツキをある程度、改善できます。さらに、大きい子豚を早期に里子に出すなどの対応も有効です。



図 哺乳する子豚（温度が適正で活力がある望ましい状態）：子豚の活力が高く、衛生状態も良好。

それぞれ、気づいた点をメモする習慣をつけることが改善につながります。また、状況

は日々変化します。「この腹の子豚は昨日まで調子良かったのに、今日は全体的に調子が悪い・・・」といった状況もあると思います。異常が認められたら、早期に考えられる処置をすることが大切です。

生産環境部 前田